典の讀書と民俗學的な體驗から得たこの古代史研究方法は實に優れたものであつて、吾人は氏の天才に感嘆せざるを得ない。宜なるかな此の古史辨自序に提唱した研究方法はのちに古史中の・種々の問題に應用され、近年の「戰國秦漢間人的造僞與辨僞」「禪讓傳說起于墨家考」「夏史三論」の如き名論文を輩出するに至つた。

顧氏は自己の古代史研究のプランとして「まづ古代の史實をなんとか明白にし、その後に改めて各種の書籍の時代と地域を考究し、それが明かになつてから、そのうちらで、其の時其の地の傳說中の古史を抽出し、體系的整理を加へ、さらに考古學を研究して實物を審定し、民俗學を研究して傳說中の古史の意味を認識しよう。」（一三七頁）としたが、その分野を縮少して「一は說話の見地から古史の構成原理を解釋すること、二は古今の神話と傳說を體系的に叙述すること」（一三八頁）の二方面に限らうとしたと述べてゐる。說話の見地から古史の構成原因を解釋する方面の研究は着々として實現されたが、二の古今の神話と傳說とを體系的に叙述することの方は、孟姜女傳說以後殆んど試みられてゐない。この方面は實は西歐の神話學・民俗學・宗教學の助力を借らずしては不可能な事業であつて、恐らく氏の學術の限界外にあるのではないかと考へられる。

古史辨自序の文學的價値については門外漢である評者の關する所ではないが、この飜譯によつても全編を貫く情熱と誠實は讀む者の心を打つものがある。今北京留學中、顧頡剛氏と親炙し、氏の學術の最も好き理解者である平岡君の手に成る流麗な飜譯によつて此の好著が日本の學界、否一般讀書界に贈られたのは何よりの喜びである。

〔小川茂樹〕

The Wandering Lake,

by Sven Hedin.

London : G. Routledge, 1940.

XII＋293 pp. 18 s.

一九三三年の十月から翌々三五年の始めにかけて、ヘデイン博士は國民政府の委囑によつて支那本部と新疆省との間をつなぐ自動車道路建設のための調査旅行を行つた。その間の見聞を述べた一般向きの探險旅行記が「大馬の逃走」、「絹の道」、「さまよふ湖」の三部作となつて世に出たのであるが、そのうちの第三がこの本である。第一のものと第二のものとは早くに書かれて、既に邦譯も「馬仲英の逃亡」（小野忍譯、改造社版）、「赤色ルート踏破記」（高山洋吉譯、育生社版）と題されて出てゐるが、この第三の英譯版を手にしたのは最近のことである。（もつとも、瑞典語版と獨譯版とは一九三七年に出てゐたらしいが、見る機會がなかつた。）

この探險隊は、スエーデン・支那兩國人の學者に、運轉手、料理人、從者などの支那人・蒙古人を加へて總勢十五名で、大抵は一九二七—三三年の例の「西北科學考査團」Sino-Swedish Expedition に參加してゐた人達であるが、この旅行は、それとは別箇のもので、純然たる支那政府の事業であつた樣である。一行が新疆省の首府迪化に入つたときは、折からの內亂の眞最中で、一行は馬仲英の叛軍と省政府軍とにかはる〴〵監禁され、すんでのことに銃殺に處せられさうになるといふ危險にも遭ひ、また自動車やガソリンを徵發され、無電機を壞され、その他實に樣々の障害にあひながら調査がつゞけられたのである。三部作のうち、第二の「絹の道」はこの旅行全體の記錄で他の二書に書かれた部分だけを省いたものであり、第一の「大馬の逃走」は一九三四年二月迪化到着から四月一日に二度目の監禁を解かれてコルラを出發するまでの體驗——云ひかへればこの二ヶ月の間に最高頂に達してゐた內亂の見聞である。第三のこれにはロプ・ノール地方の調査が充てられてある。

二千年の昔、タリム河はクルク・タグの南麓を眞東に流れて蒲昌海に注ぎ、それに沿つて東西交通の大道、所謂「絹の道」が通じてゐて、湖岸には樓蘭の町が榮えてゐたのであつたが、河が南に曲つて流れる樣になつてロプ湖は乾燥して沙漠と化し樓蘭は廢墟となり、而して南に流れた河の終端には別にカラ・コシュンの湖が形づくられた。前世紀の末に、この河道と湖水をめぐつて、プルジエワリスキー、リヒトホーフエンのロプ・ノールに關する論爭が起り、次いでロシアのカズローフは一八九三—四年の探險に於て東に流れる舊河床を發見し、またヘデインも一九〇〇年にそれを踏査し、樓蘭遺跡の發見となつたのであつた。一九二八年西北科學團の遠征の際にトルファンに滯在中、この河が一九二一年に、突然東に向つて、その舊河道を流れはじめたとの報を聞いて、著者は直にノリン博士 Eik Norin を派遣して調査せしめ、その結果は、逸早く Across the Gobi Desert の附錄に載せられた。また一九三〇—三一年には、同隊員のヘルネル Nils Hörner 及び陳宗器兩氏が派遣せられて、新しく出來たロプ・ノールを調査測圖した。(かれらの報告は「ヘデイン七十歳頌壽記念論叢」にも見える)。こんなわけで、この地方の調査は、博士自身にとつては、この旅行においては他の何にもまして關心を持つてゐたことであつたと思はれる。

一行は一九三四年四月一日に監禁を解かれてコルラを出發して(すなはち「大馬の逃走」に述べられた事件の後に引きつゞいて)、コンチエ・ダリヤに獨木舟を浮べて、河を下り、トメンプよりいよいよ東に流れる新河道に入り、途中古代の絹の道に沿ふ遺跡などを發見しながら、ロプ・ノールに至り、湖の北半

部（前年の調査の際には踏査せられなかつた地方）を探り、また陳氏一人は樓蘭にまで行つて、六月始めにコルラに歸つた。この間別働隊は方々に分れてそれ〴〵の調査を行つた。（本書一—十三章。）これにつゞく十三、四章には、隊員ベルグマン Forke Bergman の考古學的發掘と、ヘルネル・陳兩氏の前年の探險の際の地圖作製の概略が述べられてある。（後者は西北科學考査團の略報「ゴビの謎」が書かれたときには未だ完了してゐなくてこれには述べられてゐなかつたもの、前者は本誌第一卷六號に私が紹介した所のものである。なほべ氏の報告は探險隊報告第七冊として既にストックホルムから出されてゐることを本書によつて知つた。）

コルラに歸つてからの事件は「絹の道」に詳しく書かれてあるが、どうにか同年十月に一行は迪化を立去ることが出來るやうになつての歸途に敦煌經由の自動車旅行が可能であるか否かを探るために、十一月二日安西より東に引返して再び新疆に入つたが、いろ〳〵の事情のために目的地アルトミシュ・ブラクの少し手前から引返し約一ヶ月半の後に安西に歸り着いた。（十五—十九章）すなはち「絹の道」の第十七章（英譯版では十八章）に續き、十九章（英譯版二十章）につながるコースである。

第二十章には、古來よりのロプ・ノールに關する知識の變遷特にブルジェワリスキー以來の論爭の概略が述べられ、最後の第二十一章は一九二八年以來の新河道調査の經過と、この「ロプ・ノール問題」の結論とが記されてあり、こゝの挿畫には、一八九九—一九〇〇年當時のスケッチが十數枚見られるなど、この二章は本書のうちで最も興味深い部分である。この問題についての正式の報告書はまだ出てゐない樣であるが、いづれ遠からず世に出ることであらう。

三部作の第一と第二とは、戰爭、監禁、そのほかさま〴〵の思ひ設けぬ椿事が、次から次へと勃發して、すばらしい冒險讀みものとなつてゐる。こんどのものは、それに比べれば讀みものとしては興味の少いことは已むを得ないが、それでも、單調な獨木舟旅行の間にも古墳を發掘するなど、やはりいろ〳〵の事件が起つてさほど無味乾燥ではない。〔藤枝晃〕

Studies on the Ice Age in India and associated Human Cultures.

by H. de Terra and T. T. Paterson. 1939. Washington, D. C. pp. 354, Plate VI.

本書は北米フイラデルフイヤ自然科學研究所の地質、古生物學部擔當のヘルミュー・ド・テラ氏が統裁して一九三五年に行うた印度ヒマラヤ山脈の氷河時代並びに印度の舊石器時代遺跡探險調査の結果を錄した報告書である。此の調査の豫報は既にテ